

# パーソナリティのそもそも論をしよう

渡邊 芳之, 小塩 真司, 北村 英哉, 詫摩 武俊

2016年4月28日発行 (Ver. 1.0) ●発行元: ちとせプレス

パーソナリティのそもそも論をしよう。パーソナリティ心理学の歴史的・社会的文脈と最近の動きとを結びつけることで何が見えてくるのか。日本パーソナリティ心理学会との共同企画として、理事長の渡邊芳之教授と常任理事の小塩真司教授が対談を行い、参加された北村英哉教授、詫摩武俊名誉教授らと交えて議論を深めました。

## Section 1

### いま、そもそも論をする意味

**渡邊芳之 (以下, 渡邊)**: 帯広畜産大学の渡邊です。現在、日本パーソナリティ心理学会<sup>(1)</sup>の理事長をしています。今年まで、学会誌『パーソナリティ研究』の編集委員長を長く務めてきました。これからこの学会をどうしていくかということの1つとして、パーソナリティや性格についてのそもそも論をする場所を設けたいと思っていて、このような研究会を企画しました。

**小塩真司 (以下, 小塩)**: 早稲田大学の小塩です。いま、日本パーソナリティ心理学会の国際交流委員長をしています。2016年の日本パーソナリティ心理学会でも海外からゲストを呼んで、国際交流をしていきたいと思っています。最近若い世代は海外の学会に行って発表もしていると思いますが、個々には交流はありますが、言葉の問題もあって、隔絶したところもあるので、そういった実感をお話できればと思っています。

**北村英哉 (以下, 北村)**: 関西大学の北村です。来年度、関西大学で開催する日本パーソナリティ心理学会大会<sup>(2)</sup>の大会委員長をしております、何か企画のヒントを得られればと思っています。

**詫摩武俊 (以下, 詫摩)**: 詫摩と申します。日本パーソナリティ心理学会は、以前は日本性格心理学会と言いました。いまから30年ほど前に日本大学の政大先生<sup>(3)</sup>と私と、あと渡邊君と佐藤達哉君<sup>(4)</sup>が私のおりました東京都立大学の大学院の学生でして、大村先生を含めて4人でいろいろと話をしました。ちょうどいろいろな学会が作られる頃だったので、性格心理学会を作ろうという話になり、平成になってからできました。ですので、学会ができてから平成の年数と同じくらいになります。私が初代の理事長を務めました。大学を辞めた後はしばらく非常勤の講義などをしておりましたが、いまはどこにも所属せず、まったく何もしていません。今日は若い方が集まって、性格やパーソナリティの遺伝と環境の問題についてお話があるということのを伺ったのでまいりました。

**渡邊**: 今日は他に日本パーソナリティ心理学会の若い方が何人か来てくださって、ありがたいです。また、私の恩師である詫摩先生がわざわざ来てくださいましたが、このことは今日われわれがこの研究会をやろうと思ったことと非常に関係があります。

私が東洋大学の社会学部で社会心理学の基礎教育を受けて、東京都立大学の大学院に進み、社会心理学の加藤義明先生<sup>(5)</sup>の研究室に入りました。そのとき東京都立大学の研究室の主任教授でいらしたのが詫摩先生でした。詫摩先生は心理学講座で人格心理学を担当されていました。

1年生の最初のときに詫摩先生の人格心理学のゼミをとって、そのときのゼミが、世界にはいろいろなパーソナリティの理論があるので、院生1人ひとりがいろいろなパーソナリティ理論について勉強してきて発表をしろ、というものでした。私は社会学部卒業でしたから、心理学の一般的な概論を習いませんでしたので、パーソナリティの心理学のことは受験勉強の際に概論書で勉強したくらいでした。いろいろなパー

ソナリティ理論から1つを選べと言われても選べなかったんですが、詫摩先生が「いろいろな理論が世界にはありますが、中にはアメリカのミシェル<sup>(6)</sup>という、パーソナリティなんてないという心理学者もいる」とおっしゃった。それを聞いて、私は「ええっ」と思い、興味をもちました。そのミシエルの *Personality and assessment* という本<sup>(7)</sup> を読もうと思いましたが、アメリカでもそれが絶版で手に入らなかったのですが、先輩がその本をもっておられて、本を借り、それを勉強したのが、私の心理学者人生の始まりでした。

ミシエルの本を読んで、私はまったく違和感がありませんでした。ミシエルは広い意味では社会心理学の研究者で、かつきちんとした行動主義の教育を受けた人でした。日本パーソナリティ心理学会の前の前の理事長であった杉山憲司先生<sup>(8)</sup> をご存じだと思いますけれど、私は東洋大学の1年生のときのゼミは杉山先生でした。杉山先生はいまでこそパーソナリティ心理学者という位置づけだと思いますが、もともとは青山学院大学でネズミを使って学習の研究をされていました。学習理論からパーソナリティや社会的行動を考えるという基礎教育を東洋大学の学部で受け、東京都立大学に行ったらミシエルを読むことになった。運命みたいなものだったのかなと思います。

詫摩先生のゼミでミシエルの本を發表させていただいて、すごく面白かったので、詫摩先生にこの本を翻訳できないかを相談し、誠信書房から刊行することができました。詫摩先生のご専門は双生児研究で性格の遺伝です。東京大学の博士論文も双生児研究でお書きになられましたし、遺伝を基盤にした性格研究の日本の第一人者としてこれまで研究をされてきました。

面白くないですか。性格の遺伝が主な専門である先生のゼミで、私は性格なんて状況でどうとでも変わるという本に出会い、それが私の一生のテーマの1つになっている。そういう環境が、昔はいろいろなところがありました。毎日先生方といろいろなとりとめのない話をして、昔のことを教えてもらいました。詫摩先生は三十何年も先輩の先生ですが、私が院生の頃には他の先生方や先輩の方からも昔はこうだったとか、自分の分野ではこんなことがあってとかいう話を聞く機会がものすごくいっぱいありました。

それがいまどうなのかなということがちょっと気になっていました。最近、方法論とか研究法の本がすごく売れるそうです。私たちの頃は研究法は先生や先輩から直接教わるもので、本で勉強するということはありませんでした。大きな理由として2つあると思います。先生や先輩と院生との距離が近くて教わりやすか

ったということが1つですが、もう1つは方法が複雑になって難しくなったということがあります。院生が勉強しなければいけない研究方法がすごく増えてきて、先輩から教わっているのでは間に合わなくなったということも大きいのだと思います。

研究室の環境でインフォーマルな場で伝えられてきた昔話や研究上のいろいろな、文字にして伝えるには適さない知識だとかやり方、作法などが、若い人たちに伝える場所が減っているのではないかと少し感じています。大学や研究機関でそういったことがなくなってきているのであれば、その一部を学会が肩代わりするということができないかと少し前から考えていました。

今日お話しさせていただく小塩先生は私の10歳年下です。詫摩先生と私ほど離れてはいませんが、10歳も違うと心理学の世界での経験がだいぶ違います。見えているものが違います。私はおじさん役で昔の話をするのですが、小塩先生は最近の研究をいろいろご存じですから、いくつかのテーマについて私が昔話をし、小塩先生が最近はどうです、という話をしながら考えていったら面白いのではないかと思います。

## 変わるものと変わらないもの——遺伝と環境をめぐって

**渡邊：**最初に、変わるもの変わらないもの、として遺伝や環境の問題を考えていきたいと思っています。これは、パーソナリティ心理学の中で昔からずっと、そしていまでも議論されている大きな論点です。詫摩先生は遺伝の研究、双子の研究がご専門で、日本で双子研究が始まった初期の頃からご存じでいらっしゃいます。少しお話を伺えればと思います。

**詫摩：**古い話ですが、私がドイツに留学して帰った頃に、双子の研究は第一次大戦と第二次大戦の間にドイツで非常に盛んでした。ヒトラーが政権をもっていた頃、ドイツ民族の優秀性を証明するために、双子の研究が盛んでした。その中心人物であったクルト・ゴッシャルト教授<sup>(9)</sup> が戦争が終わった後、ベルリン大学の教授をしていました。当時のベルリンは東ベルリンと西ベルリンに分かれており、教授はもともと東ベルリン大学にいました。1957、8年頃にゴッシャルト教授を訪ね、双子研究の面白さなどを伺いました。

ゴッシャルトはベルリンの壁ができる直前に西ドイツに脱出し、ゲッチンゲン大学の教授になりました。ゲッチンゲン大学は西ドイツにありましたので、何度か私も訪ね、話をしたことが数回ありました。ゴッシ

ヤルトの自宅に行き、双子研究の話を何度もしました。私も双子の家庭を訪ねたりしたことがあります。

双子の研究はドイツ民族の優秀性を証明するためのものでした。ドイツの双子研究は英語圏で紹介されませんでした。日本人がたくさんドイツに行き、特に精神科の先生方はドイツに行き、双子の研究をさせていただきました。

内村鑑三先生<sup>(10)</sup>の息子である、東京大学の内村祐之教授<sup>(11)</sup>がドイツの双子研究をつぶさに見学され、それを東京大学の精神科の先生に教えておられました。そうこともあって、戦後に東京大学の附属中学校ができたときに、特色をつけた方がよいだろうということで、双子の子どもを優先的にとることになりました。毎年20組の双子を検査をして入れることになりました。いい機会だということで、双子の研究者たちがたくさん集まって、指紋の研究をしたり、視力の研究をしたりしました。私は駆け出しの卒業生でしたが、知能検査の研究をしたり、ちょっとした知的動作の研究をさせてもらったりしました。それが後の双生児研究班に発展していきました。

人間は親やきょうだいの顔が何となく似ているように、形のある身長とか体重とかのほかに、怒りっぽいか憂うつ気味であるとか性格的な、形のない心理学の関わる特徴についても遺伝というものがあるのではないだろうか、と考えていました。私は知的動作がどのくらい遺伝するのかということについて、ドイツから帰ってきてからたくさんの双子についてデータを集めました。700~800人くらいの双子たちに会った覚えがあります。それを30代の終わりくらいに私の学位論文にまとめました。

双子を選んで、野尻湖や山中湖などに連れて行って合宿をしました。双子たちが朝起きてから夜寝るまでの行動をくわしく観察するというのをしました。1日十時間も子どもたちの行動を眺めていたこともありましたが、いまでも印象に残っているのは、野尻湖に中学校1年生くらいの男の子の2組の双子と、私の前に2人、後ろに2人、子どもたちと一緒にボートで岸を離れたところ、霧が出てきて、まるで見えなくなってきました。浮かんでいればいつか戻れることはわかっていたのですが、まるで先が見えなくなったので、双子は心配そうにして、1組の双子は「先生、大丈夫ですか」と泣き声を出していました。私がかうまくない歌を歌ってから元気を出そうとしたのですが、1つのペアはあわせて喜んで歌を歌っていましたが、もう1つのペアは泣きべそをかいていました。その対照が非常に明確でしたので、こんなところに出るんだという

ことが印象に残っています。ほかには寝相の研究などもしました。

しかし、だんだんと双子の研究が継続しにくくなりました。双子の研究は一時非常に盛んになりましたが、かなりプライベートなことにも立ち入った質問もしますし、どこかに連れていくときにはこちらで費用を用意しなければいけません。そういう費用を集めるということも、難しくなってきました。なにより、双子だけを連れて行って、他の子どもたちは連れていくことができないということが、学校全体にとって好ましくないということから機会がなくなってしまいました。双生児合宿をすることも難しくなってしまいました。

渡邊：詫摩先生から、戦前のドイツの双生児研究が日本に入ってきて、という話を伺いました。若い方はどういう歴史感覚でいまのお話をとらえられたのでしょうか。パーソナリティの研究は何度も繰り返し遺伝優位になったり環境優位になったりします。自分の世代を考えると、遺伝の研究はひと世代前の先生方がすごく熱心にされていて、15歳上ぐらいの方から環境論が強くなってきたと思います。私が大学院に入った頃は、パーソナリティの遺伝論はあまり人気がありませんでした。詫摩先生を始め何人かの先生がやられていましたけど、私たちが学生の頃だと養育環境や育て方がパーソナリティに一番影響を与えるというのが主流の考え方で、環境論が強い時代でした。

ミシエルの *Personality and assessment* が出たのが、1968年です。1980年代の前半はパーソナリティの環境論全盛みたいな感じだったと思います。そうはいっても、その問題のそもそも論があったかという点、そうでもない。養育環境や養育態度とパーソナリティの関係を研究するような実証研究が山ほど行われているだけで、遺伝論から環境論に代わったと誰かが言ったわけではない。パーソナリティの環境論はこういうものとはっきり書いてあったりもしませんでした。そこが不思議な感じがしました。

私は社会学部で社会心理学を学びましたが、社会心理学は流行がはっきりと変わっていきます。私の頃は、「これからは社会的認知だ」と言っていました。その2、3年後に、「これからは自己だ」となった。そういう社会心理学の分野から来たので、特に私はパーソナリティ心理学という分野がよくわからなかった。はっきりせずに、そのあとも漠然といつの間にか流れが変わっていきました。その頃は環境重視でしたけど、そのもとになっているのは何なのかという点、それはないわけですね。そういうことが気になりました。

最近すごく遺伝優位になってきているように私は感

じるのですが、みなさんにとってはいかがですか。それとも最初から、遺伝の指標をとることは当たり前でしようか。

**フロア**：大学の頃にパーソナリティを習ったときだと、「昔は遺伝とか状況とか言われていたけれど、いまはどっちもあるよ」と授業で習いました。遺伝的な指標をいろいろとるようになったという話は、最近聞くようにまたなったなど感じます。それはいろいろと発展して研究ができるようになったからかなと思います。

**渡邊**：そうすると、パーソナリティ心理学の知識を勉強したときには昔は遺伝と環境の論争がありましたが、いまは両方ですと言われたわけですね。両方でもないよね、小塩先生。

**小塩**：そうですね。僕の大学院時代が1990年代ですが、大学、大学院のときはあまり遺伝は出てきていないように思います。ですので、あまり遺伝のことを考えたことがありませんでした。変わってきたのは2000年に入ったくらいですかね。安藤寿康先生<sup>(12)</sup>は1990年代には遺伝の研究をすでにされていたと思いますが、他の方は遺伝をあまり取り上げられていませんでしたね。

**渡邊**：1985年だったら、日本の心理学者で論文の中に遺伝のことが書いてあるのは詫摩先生と安藤先生くらいしかいなかったよね。本当にあつという間だったというのが私世代の認識です。今年まで『パーソナリティ研究』の編集長をずっとしてきましたが、遺伝指標が入っている論文がこの数年でどんどん増えました。30歳前後にかけての若い人たちです。

**小塩**：先ほど方法論の話がありましたが、方法論の本がはやっているのは大学院生たちが切羽詰まっているからだとも思います。すぐに論文を書かなければいけないので、方法をどうするかをマニュアル的に見なければいけないというのは時代の要請としてあると思います。遺伝のことも、構造方程式モデリングが双子のデータの扱い方を大きく変えたと思います。方法が1つできて定着すると論文が量産できるので、それで一気に遺伝のことも取り上げられるようになってきた。それまでは、一卵性と二卵性の相関係数が、という話をしていたのが、遺伝と環境を潜在変数で分離できることになったことで、一気に遺伝率、環境の影響力といったことが言えるようになったのが大きいかなと思います。

**渡邊**：その間に遺伝学の進歩もすごくあったと思います。心理学者でも遺伝の指標をとるような人が遺伝について勉強する教科書に書かれてある基本的な知識

というものは1960年代、70年代くらいのもので、それより前の40年代、50年代は遺伝学でも遺伝率なんてことはあまり言わなかったし、もっと遺伝決定論的なことがあった。遺伝学の進歩というのものも、心理学者が遺伝指標を使えるようになったことと深い関係があると思います。

そうはいつでも、また環境論の時代が来るだろうと思っています。これは何度も何度も繰り返されるもので、遺伝をベースにした研究がある程度続くと、1つはある程度やりつくされるという時期が来るし、方法論の問題点や欠点も見えてくることもある。そこから、新しいことに飛びつく人たちが環境に行くということが、繰り返し起きるんだろうなと思っています。若いみなさんは遺伝と環境の相互作用というのが、このままずっといくというイメージなんですかね。

**小塩**：新しい行動遺伝学の論文は非常に複雑で、遺伝と何かの交互作用のモデルが中心になっている。パッと見てもわからないし読み取れない。

**渡邊**：安藤先生がずっとなさってきたような研究って、私は環境の影響力がはっきりわかるようになったよな、という印象が強いんです。必ずしも行動遺伝学の研究が遺伝原理主義ではないし。

**小塩**：違いますよね。

**渡邊**：行動遺伝学的なものが主流になっていくのであれば、それは基本的な研究のパラダイムとしてはこのままずっと行くのかなというところはある。それにしても、遺伝的な部分に注目がおかれるか、環境の部分に注目がおかれるかということは時代背景で変わってくると思います。遺伝と環境の問題って、研究の方法論の問題でもあるけれども、もう1つは心理学の基本的なイデオロギーのような問題と関わってくると思います。

「変わるもの変わらない」に関して、2005年に『心理学史の新しいかたち』に「遺伝と環境」論争が紡ぎだすもの」を書きました<sup>(13)</sup>。その本で遺伝を重視して見るということ、環境を重視して見るということの一番大きな違いは、遺伝そのものは変わらないもの、環境は変わるものなので、変わらないものを見るか変わるものを見るか、ということ。遺伝要因を見るということはそこから予測するということが大事なことになると思う。先日の日本心理学会でもいろいろな研究を見ましたけれど、遺伝指標からの予測ということが重視されていました。何年後、何十年後の幸福が遺伝指標から予測される、というような研究です。

遺伝指標を使うことと予測するということとは深い関係にあります。一方、環境志向というのは、制御、

コントロールだと思う。昔、『性格は変わる、変えられる』という本<sup>(14)</sup>を書きましたが、環境の影響があるということは、環境要因が大きく影響する性格変数があれば、環境をコントロールすれば変えられる、ということです。これは事実というよりはイデオロギーなんですよ、本当に変えられるかどうかはわからないですから。その2つの、変わらないものに準拠して予測するという方法論と、変わるものに準拠してコントロールする方法論って、100年前からずっと同じなんです。心理学が始まったときからずっと同じ。

ゴルトン<sup>(15)</sup>やピアソン<sup>(16)</sup>の心理測定学というのは、予測するものです。一方、環境論としてワトソン<sup>(17)</sup>は、子どもを与えてくれれば何にでもしよう、ということを行いました。その時代から、この2つの相反してしまうような研究の大きな方向性のイデオロギーが変わらずにあり、それがこっちに揺れてみたり、こっちに揺れてみたりしているように思います。それがおそらく、その時代のいろいろな時代背景に結びついているんじゃないか、と考えるようになりました。

この前の対談<sup>(18)</sup>でも話したのですが、ミシエルの本が出た1968年はどのような時代だったかという、当時のアメリカのウエストコーストは、フラワー・ムーブメントでヒッピー、ドラッグ文化、サイケデリックがはやっていて、軽いものから重いものまで麻薬をいろいろ使って、その麻薬で意識のあり方を変える(altered states)ところから新しい文化が生まれるということがすごく期待をもって見られていた。麻薬の問題も麻薬中毒の暗黒面よりも、特にマリファナのような比較的軽いものについてはそれで創造性が強くなるとか、素晴らしい芸術が生まれる、というような、何かを変えることで新しくいいものが生まれてくるという楽観的なイメージをアメリカの人たちが共有していた時代でした。その時代とミシエルの本は結びついていると思います。

そう考えると、最近になって遺伝指標が見直されるようになったこと、社会の変化がどう結びついているのかということ、長く研究してきている人間としては気になってくる。そのあたりは小塩先生はどう考えますか。

**小塩：**人間の特質として、根本的に両立して考えるのが難しいんじゃないかと思っています。あまり複雑に考えられず、それで揺れ動くということはあるのではないかと思います。長期の縦断研究でパーソナリティから生死や病気などを予測していくときには、性格はそんなに変わらないということで固定しておいて、それを基準にこれが高い方が寿命がどうなる、という

ような生存曲線を描いたりする。そうすると、変わらないという前提の背後に何かがあるかを考えなければいけなくて、そのうちの分散のいくつかは遺伝で、ということになるのかなと思います。性格自体が変容するのであれば、寿命を予測するという研究自体が成立しなくなってきてしまうので、そのために固定化するという話になってしまいます。

時代の変化もあると思うんですけど、いろいろなデータを見ることができるようになってきている、ということもあるように思います。長期にわたるデータがとれてしまうと、大規模なデータがとれてしまうとか。パーセンテージはどれくらいにせよ、予測ができちゃうんじゃないかとか、関連が出ちゃうんじゃないか、ということもあるのかなと思います。

## ■ 文献・注

- (1) 日本パーソナリティ心理学会のウェブサイト  
<http://jspp.gr.jp/>
- (2) 日本パーソナリティ心理学会第25回大会(9月14日, 15日に関西大学にて開催)のウェブサイト  
<http://conference.wdc-jp.com/jspp/25/>
- (3) 大村政男(1925-2015)。パーソナリティ心理学者, 元日本大学教授。
- (4) 佐藤達哉(1962-)。社会心理学, 心理学史, 質的心理学を専門とする心理学者。立命館大学教授。
- (5) 加藤義明(1977-1996)。社会心理学者。元東京都立大学教授。
- (6) ミシエル(W. Mischel: 1930-) : 1960年代, パーソナリティの状況論に関する研究で学界にインパクトを与えた。主著に『パーソナリティの理論——状況主義的アプローチ』『マッシュマロ・テスト——成功する子・しない子』など。
- (7) Mischel, W. (1968). *Personality and assessment*. Lawrence Erlbaum Associates. (詫摩武俊監訳, 1980『パーソナリティの理論——状況主義的アプローチ』誠信書房)
- (8) 杉山憲司。パーソナリティ心理学者。東洋大学名誉教授。
- (9) ゴツシャルト(Kurt Gottschaldt: 1902-1991)。ドイツの心理学者。
- (10) 内村鑑三(1861-1930)。キリスト教思想家。
- (11) 内村祐之(1987-1980)。医学者, 精神科医。元東京大学教授。
- (12) 安藤寿康(1958-)。行動遺伝学, パーソナリティ心理学を専門とする心理学者。慶應義塾大学教授。
- (13) 渡邊芳之(2005)。「遺伝と環境」論争が紡ぎだすもの『心理学史の新しいかたち』誠信書房
- (14) 渡邊芳之・佐藤達哉(1996)。「『性格は変わる, 変えられる——多面性格と性格変容の心理学』自由国民社
- (15) ゴルトン(Sir Francis Galton: 1822-1911)。イギリスの人類学者, 統計学者。
- (16) ピアソン(Karl Pearson: 1857-1936)。イギリスの数理統計学者。
- (17) ワトソン(John Broadus Watson: 1878-1958)。アメリカの心理学者。行動主義心理学の創始者。
- (18) 渡邊芳之・小塩真司(2015)。「歴史的・社会的文脈の中で心理学をとらえる」サイナビ!

## Section 2

### パーソナリティ概念

**渡邊**：私たちが大学院に入った頃には長期の縦断研究は、詫摩先生の双子の研究が代表的でした。縦断的なデータセットが1985年にはなかった。いまはそれがある。縦断的なデータセットが手に入るようになると、縦断的なデータに合った分析をしたくなる。縦断的なデータに合った分析の典型的なものといえば、予測ができるかどうか、ということ。

いまの話で、パーソナリティという概念はかわいそうなものだと思った。必要に応じて、意味が書き換えられてしまうもので、いまの話は典型的なことで1970年代、80年代にあった養育態度と性格の関係の研究だと、パーソナリティは従属変数で、結果だった。一方、いま先生が研究されているような研究だと、独立変数で、非常にたくさんある独立変数の中のごく一部になっている。

同じようなことを感じたのは、私は畜産の大学に勤めていますが、そこで優良盲導犬の生殖科学的育成という研究に少し関わりました。基礎知識として、盲導犬は盲導犬として使われる前にオスもメスも去勢されてしまうので優秀な盲導犬の子どもというのは原則としてできないわけです。そうしたなか、どうやって優秀な盲導犬を育成していくかを、具体的には去勢する際に、精巣や卵巣、子宮などを凍結保存しておいて、それを移植したりして、優秀な盲導犬を作ろうとしています。そこに心理学者も入っています。

**小塩**：帯広畜産大学で開催されたパーソナリティ心理学会（第16回大会）で話がありましたね。

**渡邊**：そうそう。そのときに講演をしてもらいました。その研究グループの中にいたら、性格ということの役割は非常に明確です。彼らは遺伝と環境という言い方はせず、適性と訓練と言います。畜産でいうと本来は、適性というのは育種なんです。盲導犬の場合はそういう特殊事情があり、人為交配で作っていくことができないので、特別な方法を使うことになっています。

訓練というのはすごくはっきりしていて、盲導犬協会が全国各地にあって、ある程度確立された訓練技法を使って、盲導犬として必要な技能の内容は訓練できます。彼らに言わせると、それでも訓練できないもの

がある。それが性格だというわけです。

盲導犬は人と慣れないイヌは使えないですけど、人と慣れすぎてもいけない。ユーザー（利用者）以外にも尻尾を振ってしまうイヌは向かない。適切な対人性が決まっている。いままでは、候補になるイヌは全部訓練して、その中から3割、4割がうまくいく。その他、性格面でうまくいかないイヌもいる。そういうイヌはどうするかというと、盲導犬のキャンペーンで募金箱を置いて募金している場面を見たことがある人もいるかと思いますが、そこに来る盲導犬は外された盲導犬なんです。使える盲導犬はユーザーのところで働かなくてはいけないので。この外れるイヌをいかに小さくするか。

そのときに用いるのが性格で、そこで調べられるのは遺伝だけなんです。すぐに遺伝子の分析になる。彼らはパーソナリティと言わずキャラクターと言いますが、彼らの言うキャラクターは100%生得的なもので、見られる指標は遺伝です。その研究グループでは、対人性に影響する遺伝子座をいくつか発見して、2、3本論文になっています。

**小塩**：その対人性は、どうやって把握するんですか。

**渡邊**：それは質問紙。

**小塩**：質問紙ですよ。

**渡邊**：それが質問紙なんだよね。後でそのことには触れようと思うけど。

**小塩**：そのことを帯広で開催されたパーソナリティ心理学会大会で思ったんです。結局、チェックリストで聞くんだ、と思いました。先日インターネットで見た脳科学に関する記事でもそうなんですけれど、質問紙で例えば幸福感を測って、それで反応する脳の部位を特定するわけじゃないですか。どちらが誤差が少ないんだろう、と思います。質問紙で測っている時点でけっこう誤差が入りまくっているものを基準にするわけですよ。

**渡邊**：従属変数というか基準変数ですからね。

**小塩**：基準ですよ。基準関連妥当性じゃないですか。それを基準にしておいて、遺伝子座を探す、あるいは脳のどこが光るかを探さなければいけません。

**渡邊**：盲導犬の話も、最終的に盲導犬の適性がどのように判断されるかということ、訓練士がこいつはいいということに落とし込まれていく。面白いのは、質問紙と遺伝指標が全然相関しないかということとそんなことはないじゃないですか。若い研究者のみなさんがなさっているみたいにちゃんと相関するし、いろいろな予測ができるわけですよ。質問紙っていいものなんじゃないのというのが1つだし、盲導犬でいえば訓練士

の目を誰も否定できない、すごく妥当性のあるものと考えられている。むしろ客観的な意味での盲導犬としての適性を予測するのではなく、絶対的な妥当性をもって社会的に承認されている盲導犬訓練士の判断を予測するわけです。

**小塩：**なるほど。

**渡邊：**そこでも、訓練士が判断する対人性や適性は広い意味でのパーソナリティでしょう。先ほど、目的に応じてパーソナリティの概念が独立変数になったり従属変数になったりするという話をしましたが、それだけじゃなくてパーソナリティの変数がどのように測定され、把握されるかということも研究の目的によっていくらでも変わってしまう。そのことにおそらく多くの人は違和感をもっていない。

われわれ世代だと、そこでまたそもそも論を考えてしまう。そもそもパーソナリティって何よ、と。どんな立場をとるにしてもパーソナリティの定義はできると思っていて、「ある程度一貫して見られる行動の個人的な特徴」が、最大公約数的なところでしょう。問題はその「ある程度」なんです。パーソナリティは変えられるものだと考えるときの「ある程度」は、またいつ変わってもよいわけです。ある程度をどのくらいのスパンで見るとか。パーソナリティをとらえる立場によって、「変わる」とか「変わらない」ということの意味も変わってしまう。何を「変わる」というのか、何を「変わらない」というのか。

**詫摩：**盲導犬の話が出て興味深く聞いたのですが、私はイヌを飼ったことがないのですが、国際的には同じような訓練をやっているんでしょうか。

**渡邊：**おおよそ同じものです。団体ごとのやり方もありますので、標準化されているわけではありませんけれども。全部の団体ではないかもしれませんが、日本の盲導犬の訓練は基本的には輸入されたもので、かけ声も英語でやりますし、盲導犬を使う視覚障害者の方も英語で号令をかけないといけないようです。

**詫摩：**去勢をするという話がありますが、おとなしくなるということだけでなく、他の面でイヌのパーソナリティが変わることはあるんですか。

**渡邊：**おとなしくなるというのは聞きます。去勢する一番大きな理由は発情期のときの世話が面倒になるからだそうです。オスでもメスでも。なので、かわいそうなものなんです。

## 社会の要請と心理学研究

**小塩：**先ほど、盲導犬のところでおっしゃった予測

ですが、予測は最近、非認知特性として注目されています。シカゴ大学の経済学部のヘックマン<sup>(1)</sup>が言い出したことで、知能に代表されるような認知的な特性は社会的な予測力はある程度昔から確認されてきていますが、それに加えて、非認知的な特性も同じぐらい予測力があるという話になってきている。ミシェルだとマシュマロ・テストですよ<sup>(2)</sup>。自己制御だとか。

**渡邊：**ミシェルは最近はそのついで注目されているよね。

**小塩：**そういったものも、将来を予測するからということで、重視されるわけです。自己制御であったり楽観性であったり幸福感であったり。そういった特性は社会を生きていくうえでプラスに働く特性であると。だから知能と同じように、学校で伸ばす教育をしなればとか、そこに社会的な投資をすとか学校教育で対処するとか、そうすると親子関係がどうで、みたいな話になってきています。そういった概念の有効性が、社会において予測力があるということが1つの根拠になっているような気がします。

**渡邊：**先生も言いかけたことだと思いますが、知能に予測力があるとして、それが何なのかということですよ。それにはどういう意味があるのか。あるいは非認知特性に予測力があるとして、例えばそれで人間の幸福が決まるとして。それは何に使うのか、ということなんですよ。そこからはイデオロギーの話になっていく。

**小塩：**そうですね。

**渡邊：**こういう問題って、逆に考えるとわかりやすいところがあると思うんです。こうでこうだからこう、と説明されているものが、本当は最後の方が先で、こうやりたいからこうで、だからこう、という感じがしています。そのあたりも遺伝か環境かの大きな流れと結びついているんだらうなという感じがします。社会的要請が先にあって、そのことは全然悪いことではないのですが、現場の研究者が社会的要請を意外と認識していないんじゃないかと思うときがある。自分がやっているこの研究がどういうふうに社会で活用されるのかなというイメージ。その中にはあまり明るい未来ではないものも含まれている。そういうことを考えることが、こういう変化が大きい時期にはすごく大事なかなと思います。何で予測したいのかなあ、ということですよ。

**小塩：**学生の卒業論文を見ていてよくそう思います。すぐに親子関係でこういう養育だからこういう性格になる、という研究をすごくしたがるんですが、それが出てどうするの、と。こうなっちゃった人に対してど

うするのかとか、過去はさかのぼれないじゃないかと思うんですけど。

**渡邊**：それも後づけの説明の役割がきつとあるんですよね。卒業研究くらいだと、自分の個人的な成育歴や興味がテーマ選びには反映されるじゃないですか。そういう目的であれば、それはそれでいいんですが、もうちょっとちゃんとしたサイエンスと言われるような研究として行われて、かつそれが論文として発表されたときにそれがどこに行くのか、というのはけっこう気になります。そのことと、遺伝指標がすごく便利に使われるようになったときに何を考えるべきかということ、ある種の政治的な問題として気になります。私たちの頃は心理学者が研究成果から何らかの政治に関わるような提言や発言をしたりすることはあまりありませんでした。むしろ、やめなさいと言われる感じがありました。それがこの十何年かで変わってきている感じがします。

## パーソナリティ心理学と価値

**渡邊**：印象に残っていることがあります。立命館大学で佐藤達哉がやっている生存学という研究プロジェクトがあって、筋委縮症だとかそういった命に直接影響するような障害をもっている方々がどのように生存していくか、それをどうサポートできるか、を大きな研究テーマにしています。その研究会に一度参加させてもらっているいろいろな議論をしていたときに、佐藤達哉が「この研究テーマは正義を主張してよい」と言っていました。障害をもった人たちが、少しでもQOLを上げて、幸せに暮らしていけるようにする研究をするんだと。QOLを上げることは、あるいは障害と一緒に暮らしていける年数を長くすることはいいことで、いいことを実現することを目指してよい。科学研究が価値を主張してはいけないということを言っている場合じゃないと。

最近のポジティブ心理学のようなアプローチでも、はっきりと「ポジティブ」ということをいうわけじゃないですか。ポジティブ心理学が扱うテーマはただ単にポジティブな状態にあることではなくて、ポジティブになるための力のあるものは何かが中心でしょう。先ほど先生が言っていた予測の話と結びついてくるわけです。

**小塩**：そうですね。僕が院生のときはパーソナリティ概念は価値を伴わない、価値から離れた中立なものとして教えてもらったような気がします。

**渡邊**：私たちがミシエルの *Personality and assessment*

という本を訳したときに、*Assessment* という言葉を何と訳すか、すごく困った。*personality assessment* は「人格評価」と訳されますが、「評価」ってよし悪しを指すじゃないですか。大学院入試の勉強や大学院で臨床心理学などの他の分野の勉強するなかで、*assessment* はよし悪しではないと、そのときはごく普通に思っていました。*personality assessment* は良い悪いを判断するのではなく、パーソナリティの姿を価値を抜きにして表すものだと思います、われわれは「測査」という言葉にしました。『パーソナリティの理論』というタイトルで誠信書房から刊行されましたが、この本の中では *assessment* は「測査」と訳されています。

これははやらなかったですね。2、3年の間は堀毛一也先生<sup>(3)</sup>とか何人かの先生が「測査」という言葉を使ってくださったんですけど、結局定着はしませんでした。しかし、そのときになぜそのことに悩んだかということ、パーソナリティを測るときに、良いパーソナリティとか悪いパーソナリティと言ってはいけないと思っていました。それが1990年前後の様子です。一方、いまは1つにはポジティブ心理学があります。

**小塩**：その当時も、病的な方ではパーソナリティ障害が扱われていたのですが、たしかに一般的なパーソナリティについてはよし悪しはあまり考えなかったと思います。

**渡邊**：まだ学会が日本性格心理学会だったときに、「良い性格、悪い性格はあるか」という発表をしたことがあります。そのときに言ったことは、「教科書には良い性格・悪い性格はないって書いてあるけれども、明らかにあるじゃないか」ということでした。いまそう聞かれたら、みんな「いや、あるでしょ」と言う気がします。20年経つ間に自分自身の感覚も変わりました。いま、性格に良い悪いがないと、そんなに素朴には言えないです。イデオロギーとして、良い悪いがないものとして考えた方が良い、とは私自身の立場としては言うと思いますが、心理学の中で良い性格・悪い性格がないとはとても言えません。

**小塩**：いっぱいそうした特性は研究されています。

**渡邊**：ここにおられるみなさんもそういうことと関係する研究をされていますから。

**北村**：臨床心理学でちょっとさかのぼれば、精神的な病気や神経症などに関して、それが悪いのかという議論があつた時代にはありました。

**渡邊・小塩**：そうそう。

**北村**：そもそも診断などが臨床の世界ではいまは当たり前だけれども、心理診断をするということ自体の権威性みたいなことが問題にされていて、そういうこ

とが日本臨床心理学会の分裂を招いたわけです。簡単にそこに価値をもち込んで、良い人・悪い人、良い人生・悪い人生、病気はその人のせいなのか社会のせいなのか、病気や異常を定義するものは何なのか、みたいなことが議論されていました。その続きでいえば、心理学はニュートラルでなければいけないとか、性格の良し悪しを語ってはいけないというような雰囲気が生まれた時代があったように思います。

**小塩**：1970年代くらいですね。

**渡邊**：時代的には連動しているんですよ。パーソナリティの状況論みたいなもの。ヨーロッパで反精神医学運動が起きて、それが日本には比較的弱い形で入ってきましたが、日本でそれが一番はっきり表れたのが日本臨床心理学会問題ですね。

**小塩**：ちょうど最近、日本臨床心理学会編の『心理テスト——その虚構と現実』<sup>(4)</sup>を読んだんです。

**渡邊**：日本臨床心理学会<sup>(5)</sup>はいまもあります、紆余曲折があって、患者さんの立場に立つ学会になったんですよ。その中で精神科医とか臨床心理士が行う心理査定というものは権威じゃないか、と。この人はどういう異常があってとか、この人はどういう病気があって、ということ勝手に決めるな、ということになった。

**北村**：不登校の話でもその頃に出てきたのは、学校が不登校を起こすような環境を与えているから学校を改善しないといけないのが第一なのに、心理の一部の人たちは悪い学校に適応させるように子どもを変えようとしていて、それは間違っているといった議論がありました。障害者の問題でも統合教育をしようとしたとき、コミュニケーションや話すということが十分にできない子どもの入学を小学校が拒否するけれども、本人はみんなと一緒に遊びたい、というようなことがあった場合にどう考えるか。障害を障害としているのは学校や社会が一緒にできないからその人たちを排除するような定義をしているのか、障害は生来的な固定的な異常と定義するのかという議論ですよ。私たちの少し前の世代がそういうことをやっていたわけですが、そうした頃には良い悪いというようなことは非常に敏感な問題でした。

**渡邊**：そうそう、怖くて言えなかったんだよね。私はそういった考え方が内在化されているから本当に不登校の問題が出てきたら、これは学校の方に問題があって、とごく自然に考えてしまいます。

**小塩**：僕もそういう教育の名残を受けています。その流れが変わったのはおそらくDSM<sup>(6)</sup>じゃないかなと思います。

**北村**：どちらかというと、そういう反精神医学、つまり人を治すという力を専門性としてもちうるのかという問題から日本臨床心理学会の分裂と日本心理臨床学会<sup>(7)</sup>の設立、臨床心理士の資格ということが出てきたわけです。資格を作ろうということについて、どちらかというと当時の東京大学の教育学部は違和感をもっていて、特に違和感をもっていた人の中にコミュニティ精神医学やコミュニティ心理学を研究している山本和郎先生<sup>(8)</sup>がいて、僕が学部生のときにパーソナリティ心理学という授業をならったのは山本先生でした。あと依田明先生<sup>(9)</sup>。

**渡邊**：そもそも、パーソナリティ心理学という授業が昔はあまりなかったですね。

**北村**：パーソナリティ心理学、その頃は人格心理学ですが、文学部で詫摩先生が授業をされていたので、僕のはのぞきに行っていました。教育学部で人格心理学の授業をやっていたのは山本先生。他に発達観の観点で授業をされている方もいました。

**渡邊**：昔はいろいろな大学のちょっと特徴のある授業があるとみんなそこにもぐって聞いていましたよね。俺も東京大学の社会心理学には授業を聞きに行きました。山本先生のパーソナリティ心理学というのはどういうものだったんですか。

**北村**：病気の説明をしていましたね。パーソナリティ障害の話を含めて、統合失調症などの病気の話が多かったような気がします。当時、自分も臨床系の学生だったので、パーソナリティに関していえば、行動主義的なものには私はまったく触れていなくて、自分のまわりでは精神分析全盛のような感じでした。パーソナリティも精神分析的人間論、精神分析的人格論みたいなものが与えられる話で、まわりもそういうことが好きな人が多かった。精神分析的人格論を学んで、助手の人も、君たちこれを読んでみたら、と「異常心理学」というシリーズ本の1冊を紹介してくれて、それを勉強しました。

**渡邊**：その頃、人格心理学やパーソナリティ心理学という同じ講義名がついていても、臨床の文脈で行われるのとそうではない文脈で行われるのとでまるで内容が違いましたよね。いまでもそうだと思うけど。

**北村**：だいぶ内容が違って、授業題目は忘れましたが、発達の文脈から人格を学んだというのは、ジェロム・ケイガン<sup>(10)</sup>の本を使っていて、環境でどのように作られていくかという話とインプリンティングみたいな話の両方が書かれてありました。時代的には環境で子どもがどう作られていくか、ということが、教育学部でしたので多かったように思います。

**渡邊**：社会学部にはその当時は人格心理学やパーソナリティ心理学の授業はなかったですが、社会学部でパーソナリティが扱われるとしたら、権威主義的パーソナリティなどの社会的パーソナリティの話でした。もう1つは知覚・認知されるものとしてのパーソナリティです。同じパーソナリティや人格でも、心理学の研究分野によって考えていることも教わっていることもまるで違いました。だからパーソナリティ心理学会がなかったんですよ。

## ■ 文献・注

- (1) ヘックマン (James Joseph Heckman: 1944- )。アメリカ合衆国のシカゴ大学の経済学者。2000年にノーベル経済学賞受賞。著書に『幼児教育の経済学』など。
- (2) ミシェル, W. (柴田裕之訳) (2015). 『マシュマロ・テスト——成功する子・しない子』早川書房
- (3) 堀毛一也 (1952- )。社会心理学者。東洋大学教授。
- (4) 日本臨床心理学会編 (1979). 『心理テスト——その虚構と現実』現代書館
- (5) 日本臨床心理学会のウェブサイト  
<http://nichirinshin.info/>
- (6) DSM (精神障害の診断と統計マニュアル)。アメリカ精神医学会による診断基準マニュアル。最新版はDSM-5。アメリカ精神医学会 (日本精神神経学会日本語版用語監修, 高橋三郎・大野裕監訳) (2015). 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院
- (7) 日本心理臨床学会のウェブサイト  
<http://www.ajcp.info/>
- (8) 山本和郎 (1935- )。コミュニティ心理学者。慶應義塾大学名誉教授。
- (9) 依田明 (1932-2015)。心理学者。元横浜国立大学教授。
- (10) ケイガン (Jerome Kagan: 1929- )。発達心理学者。ハーバード大学名誉教授。

## Section 3

### 時代の風潮

**北村**：先ほど、時代の風潮との関係を言われていましたが、ポジティブ心理学や幸せがはやっているのはなぜかなあということは私も思うんですが、高度成長などが終わって世の中が少し安定してくると、何か別の人生目標や要望など、例えば冷蔵庫が買いたいとか会社の社長になりたいとか、具体的なものが減るので、曖昧な人生の中で「幸せになりたい」というのが目標として立ってくるから、そういうウェルビーイング研究がはやって、幸せになるためにはどうすればよいのか、という話が出てくるのかなと感じました。

一方で遺伝の話が最近出てきたことをあわせて考えると、高度成長のときには社会階層の移動もいっ

ぱいあったし、頑張ればいろいろなものが変わっていく時代でしたが、そういう時代には環境によって人が変わるというイデオロギーの方がフィットすると思います。アメリカも、変わって行って成長して行って成功をつかむという社会だから、行動主義みたいに環境の影響を受けたり、自分が努力したりということでも人生が変わるというイデオロギーが伴いやすいわけですね。

階層社会学でいわれているように、だんだん固定していくと、東京大学に入るのも比較的裕福な層が多くて、金持ちで教育のある層の子どもがまた偏差値の高い大学に入って、より給与の高い会社に入るという再生産になります。固定されていくと、理由が欲しいのかな、と思うんですよ。風通しがいいときには変化に目が行くけれども、固定化が進んでしまって、どうしてだろう、ということになると、変わらないものに目が行く。変わらないから仕方がない、と。

**渡邊**：世の中が変わらないのであれば、変わらないものの方が予測力が高いものね。

**北村**：そうなんですよ。2000年代から社会学の調査などで階層の再生産というデータをどんどん示してきたじゃないですか。いつも思うんですが、社会学者は本の中で一言も言わないんですけれど、遺伝要因がありますよね。金持ちの家で教育程度が高いところに生まれたのが、お金があるから教育機会に恵まれてよい教育を受けて塾とかに行って私立中学に行くという説明なんです。遺伝要因もありますよね。そもそもg (一般知能因子) の遺伝規定性が50%くらいあるわけですから。社会学者は黙っているわけですが、世の中の人はずうずうず感じていることではないでしょうか。

**渡邊**：それは先生の言う通りで、これも順番が逆なんだよね。社会学者は言いたいことがある意味決まっていて、それを言うためにデータを利用するんだよね。言ってみれば、これじゃいけないと言いたい人たちの。ただ、この問題でこれじゃいけないと言わないというのも難しいですが。前の問題に戻りますが、遺伝の問題もすごく大きいとして、それを言うてどうするか、ということになりますよね。

**北村**：フォーク・サイコロジー (素朴心理学) では、人々の間には知能や頭の良さには遺伝的な要素があると薄々思っているところがあるんですけど、人間関係や対人関係はまだ遺伝の影響が薄いんじゃないかと思っているところがあるように思います。実際は性格も遺伝規定性があるわけですが。

**渡邊**：変えたいか予測したいのかなんですよ。研究者としても変えたい研究なのか、予測したい研究なの

かがあると思いますが、一般の人がパーソナリティや人間の能力を考えるとにも変える志向の考え方をすると、予測する、そして選抜する志向の考え方をするときの両方があります。少し前に小塩先生がおっしゃったように、同時にはできないわけですね。

**北村：**予測でみんなが考えているのか、もしかすると自分の人生の予測なのかもしれませんが、先ほど話のあった非認知特性がはやりだすというのは知能は決まっていますし仕方ないかもしれないけれど、そっちは決まらないよね、と。

**小塩：**そちらは教育で何とかかなりそうだよ。

**北村：**そうそう。偏差値が高かったり知能が高かったりしても幸せになれるとは限らない、人間関係の要素が多いよね、と。社会的な成功も人間関係や非認知要素も高いよね、とたぶん政治家も思っていると思うんですよ。そこで、非認知特性に注目してみよう、と。そこでヒントをつかめば、そこをアメリカ的に言えば、ノウハウを使って、自己制御能力を高めれば自分も成功がつかめるかもしれない。

**小塩：**小さいときからマッシュマロを我慢させるんですね。

**渡邊：**歴史的に見ていくと、行動主義が出てきたのと同じような理由で出てくるんですよ。20世紀初めのアメリカって、家柄や門戸から解放されて実力主義の社会を作るといってイデオロギーが全体にあって、それが行動主義とぴったり合ったし、あとアセスメントもそうなんですよ。五十嵐靖博さんたちが翻訳した本で『心を名づけること』という本<sup>(1)</sup>があって、その当時のアメリカの経済発展と心理アセスメントや知能検査がどういうふうにならうまくすり合わせながら進んでいったかということがくわしく分析されています。

それと同じことがいまも起きていて、非認知特性だって、昔から非認知特性がすごく大事だったけれど心理学者が気がついていなかったという話なのか、昔の社会はそんなことはあまり大事じゃなかったけれど、最近社会の方が大事にするように変わってきたのか、という両方があると思います。最近よく言われるコミュニケーション力の問題も、確かにある程度大事だったろうと思うけれど、50年前にそれが職を得られるかどうかにかんして直接大きく影響するようなことはなかったと思います。社会の評価軸が先に変わって、心理学者が研究を行ってと、循環が起きるんですよ。

**小塩：**どちらが先かはわからないですが、発見してしまったということがあるんじゃないでしょうか。ミシェルも最初は予測していなかったじゃないですか。予測力があると後から発見してしまったわけですね。

社会の方はわかりませんが、実際にそうになっている、というのを見つけちゃったところがあると思います。

**渡邊：**見つけちゃうとそこに投資する人が出てくるわけですね。コミュニケーションという言葉は、心理学者がすごく便利に自分たちの仕事を増やすために使ってきたでしょう。私は田舎にいますが、田舎で頼まれる講演の半分くらいはより良いコミュニケーションについてお話してください、と言われる。循環が生じていて、心理学者がコミュニケーションが大事だということを強めていくような働きをしている気がします。社会的な需要だとかと研究との関係ですよ。パーソナリティ心理学研究の動きが変わっているときには、やっぱりそこに社会の変化があるんだろうなと。

**小塩：**どちらが先なんですよ。研究したことが徐々に広がっていく、ということもありますよ。研究が世の中に伝わっていくにはやはりタイムラグがあって、研究者も社会の情勢を敏感に感じ取って、「群集心理」みたいなもので流されて、何となくそっちの方に行くということなのかもしれないですけど。やったことが、ずいぶん後から世の中に伝わっていくということもあると思うんですよ。それが良かったり悪かったりしますが。

**渡邊：**心理学者は昔は「モラトリアム人間」だとか、そういうものを打ち出して、提供していくわけですよ。やや話は飛びますが、心理学って文系の学問なんだと、強く感じます。自然科学は何かを発見することはあっても、何か自然現象を作り出すということはないよね。あったものが発見されるわけですよ。もちろん技術は作られると思いますが、あったものを見つけて研究しているなかで新しく何か現実が作られているということがあるというわけですね。偏見なんですけれど、ポジティブ心理学的なものに時々感じる違和感は、何がいいのかを決めにかかっているんじゃないかと感じてしまうんですよ。

**小塩：**話が少し変わるかもしれないですが、例えばポジティブな指標を作るじゃないですか。予測力ってけっこう限られていて、自尊感情が典型的なんですけど、自尊感情が高いとポジティブだけれど、自尊感情が高いことがすべての良いことを予測するわけではないですよ。その予測力を高めようと思って、自尊感情を分けてみたり、自尊感情に加わる軸を作ってみたり、自尊感情が高くてこちら側の人がいいけれど、自尊感情が高くてこっち側の人はいらない、みたいな話になります。いろいろなところでそういうことが起きます。幸福感もオーセンティック・ハピネスという話にな

ったり、楽観性や悲観性もよいもの悪いものということになったりする。結局、予測力がないからかもしれません。ダークなパーソナリティも、それがあつてよい場面、ということになったりするわけです。

**渡邊**：例えば幸福に  $r=.30$  相関があるとすればいいですか、有意に。その  $r=.30$  の相関って、あまり個人の幸福には力をもちにくいよね。

**小塩**：そうですね。全般的には影響がありますけど。

**渡邊**：だから、大きなデータで小さな相関があるもので最も意味があるものって、政治とか行政ですよ。あるものを食べると、5%病気が減るとするのは個人のレベルではほとんど影響がないけれども、みんなが食べれば実際に病気が減るわけじゃないですか。医療費が減ったりするでしょ。行政や社会のデザインみたいなときに、 $r=.30$  くらいの説明で役に立つじゃないですか。

**小塩**：大きいですよ。

**渡邊**：そう考えると、幸福や長寿とかに  $r=.30$  くらい影響があるような指標が見つかることを、誰が役に立てるのかなあと気になります。

**小塩**：だから経済学者が来るんですね。何年前かにアメリカの ARP (Association for Research in Personality) <sup>(2)</sup> に出たときにヘックマンが講演に来ていて、パーソナリティ心理学者たちはどうなるんだと注目していました。最近日本で刊行されている行動経済学や教育関係のエビデンスのあるものが必要だという本の話って、こちらで見つけたものを行政的に応用するというものですよ。

**渡邊**：その知見をどこにもって行って使ってもらうかの方が大きくなっていて。行動経済学をやっている人が何を指標にしているのかと思ったら、質問紙なんだよね。

**小塩**：そうです。

**渡邊**：帯広畜産大学の経済学者が本を借りに来たんだけど、何かと思ったら心理尺度集でした。異常や臨床のテーマだと、それが役に立つ場所が見えやすい気がするんだけど、ポジティブ心理学に関しては、誰の幸せがどこで実現されるんだらうということを考えてしまうのと、先ほど言った特定の幸福の姿がいいものとされちゃうということがあります。文系の学問が価値を言うことの怖さってそこにあると思います。何か特定のものを宣伝することになるじゃない。

**北村**：むしろ、経済学の方から幸福やウェルビーイングを言う理由はわかるんです。心理学でそれを強調しなければいけない理由はわからないところがあります。身もふたもないことを言えば、経済学的に言えば

ある種簡便な方法で幸福感が上がるのであれば、それはまさに「経済的」なわけで。人間関係という、経済学でいえば費用がただみたいなもの、つまり社会関係資本ですが、そういうもので人々のウェルビーイングが上がれば、革命も起こさず、安定した社会で生産性が上がればいいことはないわけです。

心理学の立場だと、いろいろ多様でもいいんじゃないか、というところを価値として私は言いたいように思います。多様さの承認みたいな。幸せの型というか、幸せはこういうことで説明できますと作っていったりリストアップしていったりするのはどうしても違和感があります。

**渡邊**：先ほど北村さんが言った典型的なものって、災害の被災地に家を建てたり食べ物をもっていったりする前に臨床心理士を送り込むみたいなことってあるじゃないですか。あれは実際には効きめがないみたいですが。例えば、ああいうことが実際に、家を建てたり食料をもっていったりすることよりも心理学的なケアをした方がその後に被災者の主観的な幸福感が高いということになれば、ものすごくお金の節約になる。経済政策的にはすごく役に立つことになってしまうんだけど、「それって、どうよ」と素朴に思ってしまう。そういうことに心理学が役に立ってどうなのか、と。そこも心理学者の価値観なんですけれども。最近の倫理学を見ていても、アメリカやイギリスの人たちが、こういうのが正しいということを言いたがるじゃないですか。心理学でもそういうことがだんだん関わってくる問題になってきたなあと感じます。

**北村**：震災が起きたのは寒い時期だったから、湯たんぽでもそういうものをもっていけばすごく役に立つわけだけれど、臨床心理士が話を聞きに行くと心が温かくなると言われるかわからないですが、そうであれば費用の節約になりますよね。それでいいのかという問題ですよ。

**渡邊**：それでいいのかというときに、何が悪いんだと言われてもよくわからないんだけどね。なんとなく嫌なだけでというか。俺ぐらの世代が教育された知識や考えの内容は、そういうことがよくないという感じだったんだと思うんです。反射的にこういうのはダメになってしまうことはあります。先ほどの予測研究でも、どうしてもそれを見てそれじゃダメじゃないか、それはいけないんじゃないかと思ってしまうんですよ。それってまさに価値なんです。

われわれもそういう研究の成果を価値で判断する基準をもっているわけですよ。それをあんまり自分が価値で判断しているとは思ってなくて、「貧しい人

も同じように教育を受けてみんな共通のレベルに達することが良い」ということをイデオロギーだと思っていないんですよ。特に私より上の世代が、イデオロギーと書いていなくても持っているイデオロギーみたいなものが、いまどんどん出てくる新しい研究と摩擦みたいなものがあって。

もちろんすぐくプリミティブな感じで、遺伝研究のようなものに対する嫌悪感をもっている人はいるよね。俺ぐらいの年齢だと、それはもうないですけど。遺伝と言ってしまうことが政治的に正しくないということがまだまだあります。われわれが院生の頃はそれがものすごく強かった。遺伝なんて言うだけでダメというところがあった。1980年代くらいには、詫摩先生とか、安藤寿康先生の研究って、そういう批判を受けていたと思います。

小塩：そうですね。

渡邊：その感じをまだ残している人っているだろうし。俺の中でもまだ残っている気がします。それは違うんだということを最近強く考えていて、自分のイデオロギーとしては環境論の方がヒューマニズムだと思っているところがあったんですよ。今頃かって言われるかもしれませんが、ようやくそこを相対化できるようになってきて。予測しようとするのもコントロールしようとするのも、誰が何のためにするかであって、コントロールがヒューマニズムで予測や選抜がヒューマニズムじゃないなんてありえないですよ。

たまたま、われわれより少し前の世代は、選抜や予測がアンチ・ヒューマニズムになりやすい時代や社会で、コントロールがヒューマニズム的になりやすい時代だったんでしょう。社会心理学の黄金時代である1960年代、70年代くらいは、環境的なコントロールがヒューマニズムだということがあったんだと思います。それで教育されてきた自分たちがいたんじゃないかなと思いますし、それはきちんと相対化しないといけないと思います。むしろ、いまは心理学概論の授業を受ける学生にしてみたら、学習理論でコントロールされる方が嫌だというのが強いかもしれない。選ばれる方がいい、みたいなどころがあるかもしれないですよ。そういうこともすぐ変わっていくよね。

## ■ 文献・注

- (1) ダンジガー, K. (河野哲也監訳) (2005). 『心を名づけること——心理学の社会的構成』上・下, 勁草書房など。
- (2) ARP (Association for Research in Personality) のウェブサイト <http://www.personality-arp.org/>

## 遺伝を見るか、環境を見るか

小塩：先ほどの、社会的にあまり変化しなくなったのが遺伝の影響を高めるといことはありうるなとちょっと思いました。競馬って環境的にはほとんど変わらないじゃないですか。馬の速さを決めるのって、遺伝要素がすごく大きくなってきますよね。環境の変動の大きさが大きければ、血統が大事だと言われなくなるんだと思うんですけど。

渡邊：いま、自分のところの卒業論文で、道産子っていう北海道にしかない馬の訓練の研究をやっている人がいます。なぜ道産子の訓練が研究になるかというところ、いままでは道産子は乗馬に使っていなかったんです。乗馬に使う馬が高騰してしまって、使う馬がないからこれまで日常的な乗馬に使ってなかった道産子を乗馬に使おうとしたので、訓練の話になりました。一方で競走馬は、ずっと訓練の仕組みが古くからできていて、その中で差ができてくるのは遺伝だけなんです。だから遺伝の話になる。競馬が減って、サラブレッドを別のことに使わなければいけないということになれば、訓練の話になるんです。

小塩：そうですね。

渡邊：遺伝を見るか、環境を見るか、育種するか訓練するかは、その動物種がどう使われるかで決まる。特に使われ方が変化するときそれが変わり、環境が注目される。1960年代、70年代に環境が重視されるようになったのって、人間の使われ方が変わったんですよ。変えなければいけないから。みんなが変わっていくと思っていたら、自分を変えてくれるものを求めますよね。自分を変えるものが遺伝であったり生得的なものであったりする可能性は小さいでしょう。

小塩：そう考えられやすいですね。

北村：人間の使われ方が多様であれば違いますが、資本主義が煮詰まったり、修正資本主義で第三次産業が多くなったりすると、みんな似たような仕事をしなければいけなくなって、みんなコミュニケーションが必要な仕事になってくる。

小塩：みんなサラブレッド状態ですね。

北村：環境が大事なのは変わらなくても、サラブレッドや盲導犬みたいに育て方が確立してしまって、よい育て方がはっきりしてしまったら、その分散がなくなるから。結局規定率の問題は分散の問題ですから。重要性がなくなるわけじゃなくて、分散がなくなった

ら、相対的に遺伝の影響が大きくなるわけです。

**小塩：**そうですね。

**渡邊：**そうすると、競走馬だと、名門牧場がなくなっ  
ていってしまいます。どこで生産されても、結局重  
要なことは親が誰かになってしまう。

**小塩：**種牡馬が高騰するわけですね。

**北村：**人間の能力開発はまだ穴だらけなわけで、ま  
さに学校教育で認知能力を高める方策は研究してきた  
けれども、非認知特性はまだまだいじれるんじゃない  
かということがあって。完璧に社交的でコミュニケーション  
が得意な人間の育て方が確立したら、気色悪い  
ですが、それが確立するまでは、まだ何かあるかもし  
れないと思って、追いかけるわけでしょう。

**小塩：**なるほど。確立してしまったら、そこは遺伝  
重視になってくるわけですね。

**北村：**大事なのは、遺伝環境交互作用で、遺伝はそ  
んなに簡単なことではなくて、遺伝と環境の相互作用  
で環境がすごく重要なところもあるわけですね。行動  
遺伝学の知見が出てきて、みんな学ぶようになってき  
て知ようになったとしても、いまあちこちの心理学  
科で遺伝学やゲノム学の授業がされているわけじゃな  
いでしょう。自分を含めて、意外とみんなゲノムや遺  
伝子そのものの仕組みがわかっているわけではないし、  
遺伝子そのものを行動遺伝学でいじるわけでもない。  
構造方程式モデルで、分散の説明率を出すわけだから、  
どの遺伝子がどう働いて何をしているかということは  
行動遺伝学でされているわけではないですよ。研究  
者が両方を手を出すことはあるかもしれませんが。

**小塩：**実際は調べてもほとんどないようです。1つ  
ひとつの遺伝子に関しては。

**北村：**遺伝子そのものを調べて、それがパーソナリ  
ティとどう関係するかをつなげていく研究は今後もっ  
と出てくるでしょうけれど、若い人に向けてもちゃんと  
授業で伝えているわけではないですね。ゲノムの働  
きを国民みんなが理解しているわけでも全然ないで  
しょう。1980年代頃とあまり変わっていない。その間、  
科学では遺伝の研究が圧倒的に進んだけれども、それ  
がどれだけ教科書に反映されて、高校生が遺伝子のこ  
とをわかっているかという、何もわかっていないで  
すよね。授業をやっていると思いますけど。そこを埋  
めていって、もっと健全に遺伝といっても遺伝環境交  
互作用が大事で、それがどういうことで、環境の重要  
性は変わらない、という話をしないといけないですね。

**小塩：**遺伝の話をもパーソナリティの授業でしてい  
ても、考え方やイデオロギーを教える感じになるん  
ですよ。

**渡邊：**環境の影響については、みんな漠然とした理  
論をもっていて、それはそんなに間違っていないんだ  
よね。育て方で子どもは変わるでしょう、ってことは  
大きな間違いではない。一方で遺伝にもっているイメ  
ージは千差万別だし間違っていることも多い。いずれ  
にしても人間が環境によって変わる可能性をまったく  
考えなくなることは考えにくいですよ、例えばパー  
ソナリティ研究で遺伝の影響を重視する時代が来たか  
らといっても、そこにはすごく広大な環境の可能性が  
残されているし、それはみんなわかっているんだよね。

**北村：**複雑なことを理解することって難しく、簡  
単に考えると遺伝か環境かという二分法的思考になっ  
てしまう。二分法的に環境が大事だと言ったときに、  
例えばいま文部科学省が何人学級がどういう効果があ  
るか証拠を示せと言っているけれど、つねに文部科学  
省や国の政策が言うことって、一律にやることを求め  
るんですよ。私は小学校の頃は運動が苦手だったん  
ですけど、遺伝的に運動が苦手な人間にこういう体  
育をされたら苦痛ってことがあるんです。遺伝環境交  
互作用としてね。苦手はどうせできないことについて、  
あれやれこれやれって押しつけられても、苦しみでし  
かないということはあるわけです。万人にとってコミ  
ュニケーション力によいことや、万人にとって幸せに  
する道があるわけではないと思います。遺伝環境交互  
作用なわけです。どういう人に対して、細かくどうい  
った教育がよいのかとか、どういう人に対してどうい  
う手立てがあって、どういう人だったら、こういうふ  
うにしたら幸せかと、千差万別な遺伝環境交互作用が  
あると思います。環境が大事だと言っても、みんなが  
幸せになる環境がこれだよ、というのは単純すぎるだ  
ろうから、その単純さを単純だとみんながどう認識し  
ていくかが大切な気がします。

**渡邊：**心理学はむしろ複雑さを伝えるみたいなこと  
が大事でしょ。社会のことには経済的な限定がかかっ  
てくるから。規格化してみんな同じにした方が安い、  
ということが一方にある。規格化した方が安いとい  
うことに対して、心理学がどういう文句を言えるか、と  
いうことはありますよね。そういうことは心理学者が  
言っていかなくてもいけないと思います。かといって、  
全員用にカスタマイズした教育なんてできようがない  
んだし。あらゆるものは中間の程度問題なんです。

**北村：**中間の程度問題に耐えるのが民主主義なんじ  
ゃないでしょうかね。中間の  $r=.3$  とは何か、みたい  
なところを耐え忍ぶ人を養成するという。

## パーソナリティ研究における臨床・異常研究の位置づけ

**渡邊：**先ほど、臨床の人格心理学と臨床以外の人格心理学の話がありました。臨床の重みづけが大きくなったということと、パーソナリティ分野に使われる指標が変わってきたことと関係があるんだろうなと思います。みなさん、専門は何ですかと聞かれて何と答えますか。臨床心理学と答えますか、パーソナリティ心理学と答えますか。

**小塩：**ここにいるメンバーはパーソナリティ心理学じゃないですかね。

**渡邊：**パーソナリティ心理学って答えるの、本当。ただ、Iさんのテーマはわれわれから見ると臨床心理学ですね。

**フロア I：**臨床心理学というか異常心理学という言い方をすることは多いです。

**渡邊：**ああそうか。自分で異常心理学っていうの？

**フロア I：**言います。

**渡邊：**いま異常心理学って言っても怒られない？

**フロア I：**怒られたことはないです。

**渡邊：**ああそう。何か俺らの頃は怒られることがいろいろあったんだなあ。

**北村：**日本で復活させた言葉だよな、丹野義彦先生<sup>(1)</sup>が。

**渡邊：**異常心理学という言葉が復活したのも象徴的なことですよ。昔から、異常に関係することは遺伝指標や生理指標と結びつけるのは心理学の中ではごく普通だった。どちらかという心理学のプロパーというよりは精神医学のプロパーだったと思うけれど、精神医学の分野と臨床心理学の分野はそれほど離れてはいなかったよね。

**北村：**精神医学というより精神分析だとは思いますがけれど。

**渡邊：**東京都立大学だと、佐藤達哉や菅原ますみ先生<sup>(2)</sup>は精神科の先生方と研究していました。北村俊則先生<sup>(3)</sup>、島悟先生<sup>(4)</sup>とかと、育児ストレスの研究などをしていました。東京都立大学は精神分析の先生との関わりはあまりなかったなあ。

**北村：**北村先生は精神衛生研究所ですよ。山本和郎先生や越智浩二郎先生<sup>(5)</sup>がいたのも精神衛生研究所でしたから、そういう関わりはありましたね。

**渡邊：**いまは若い方々は精神医学の人たちとの関わりってあるんですか。

**フロア男性：**私はけっこう多いですね。

**渡邊：**心理学全体の中で臨床の占める地位がものすごく上がって、そこと精神医学との距離が当然近いで、遺伝指標みたいなものが復活してきたり、心理学の中でのパーソナリティ変数の使われ方で臨床的なものが増えてきたりしました。今回、公認心理師のカリキュラム案が出ましたが、人格心理学は臨床心理学の中に入っています。これはすごくはっきりしたことです。公認心理師の資格の仕組みのイメージでは、パーソナリティ心理学は臨床心理学の一分野なんですね。

**小塩：**認定心理士もそうですね。

**渡邊：**そうなんです。だからもともと、心理学ワールドではパーソナリティ心理学は臨床の一分野の扱いなんですね。

**小塩：**ただ、海外のパーソナリティの学会に行くと、まったく臨床がないんです。

**渡邊：**ああそう。

**小塩：**ほぼないです。パーソナリティ研究のプロパーはパーソナリティの研究をしているんです。もちろん接点はあって、DSMベースの指標をとったりはするんですが。臨床の話はないです。ARPとかISSID (International Society for the Study of Individual Differences)<sup>(6)</sup>に行っても。

**渡邊：**研究の大きな流れは共通していますよね。

**小塩：**ビッグファイブや、望ましいもの・望ましくないものとしてダーク・トライアドや幸福感などいろいろなものが入ってくるんですが、臨床の話はないです。

**渡邊：**そこの臨床というのは現場の話？

**小塩：**そうです。現場の話ですね。病理の話、異常心理学はあって、測定されたものの話はあるんですが、患者さんを処置するような話はまったくないです。

**渡邊：**そこはじゃあ違うんだね。

**小塩：**違うんです。そのイメージで来ると、日本はすごく離れた感じがしてしまいます。

**渡邊：**30年、40年の流れを見たときにどうでしょう。学会ができる前に人格やパーソナリティを言っている人がもっぱら臨床心理学分野の人だったからかなあ。

**北村：**そのうえで、資格ができて教員配置の問題が大きいのではないのでしょうか。大学の中でどういう専門の人に職があるかという話になった場合に、パーソナリティ・プロパーの人が入り込む余地が相対的に少ない。臨床心理の教員を4人、5人と入れたら、そこが授業をもってしまいますから。

**渡邊：**就職しようと思っても、「臨床心理士が必要」と書いてあったら行くことはできないものね。

**小塩：**アメリカだと、personality and social psychology という色は強くて、社会心理学よりです。ヨーロッパだと、遺伝や脳科学に近いところでパーソナリティのポストがいくつかあります。いずれにしてもアメリカでもヨーロッパでも、パーソナリティのポストはあります。

**渡邊：**脳科学の研究者と遺伝の研究者の関わり具合も、ヨーロッパでも違うんですか。

**小塩：**アメリカで脳科学をやっている人も、ヨーロッパの学会に行きますよね。アメリカだとあまりメインで出てこない。やっているのはデ・ヤング<sup>(7)</sup>くらいで。彼はヨーロッパの学会に行ってもいつも来ているので。アメリカの研究者は何かのテーマを始めたなら、必ず周辺も刈り取っているじゃないですか。その中に遺伝もあり脳科学もあり、という感じですね。

**渡邊：**アメリカだとそういう感じだよな。

**小塩：**日本だと尺度を作って研究を始めて、周辺のことをいくつかやって、それで学位をとって、そしてそのテーマが廃れてしまって、ということもある。アメリカはそうした範囲が広い感じがします。始めたなら、どこかに行って脳の指標をとり、双子でやり、という一連の研究のかたまりを作っているという気がします。脳だけをやっている人もいるんですけど、それはあまり人数は多くない。そこに乗り込んでいってやる感じかもしれません。

**渡邊：**それもこういう研究をしようという志向が違ってそうなるというよりは、研究の結果を評価するシステムの違いかな。われわれがもっている心理学の教育や研究のシステムは臨床心理士の資格ができたことにすごく大きく影響されちゃったんですよ。臨床心理士の資格ができたのっていつだろう。日本パーソナリティ心理学会ができる前ですよな。

**北村：**1980年代の終わりですかね。

**フロア：**いまのパーソナリティ心理学の中での臨床系の方の割合はどのくらいなのでしょう。

**渡邊：**日本パーソナリティ心理学会では、自分が何の専門かを特に提出してもらっていないんですが、以前に『パーソナリティ研究』に載っている論文のおおまかな領域を私が主観的に分けて数えたことがあります。私の主観で見ると、臨床系が半分くらい。ただ先ほどみたいに、「臨床ではありません」と言われてしまうと、違ってきますが。世代が違うのかもしれないけれど、私は異常だとか、不適応に向かう方の変異が入っていると、臨床だと思ってしまいます。それが私世代の感覚だと思います。そこはそんなに簡単じゃないんですかね。

**フロア I：**価値で異常—正常を決めているというよりは、平均からの距離というような感じでやっていますので。良い悪いというのが、どういうことを指すんだらうというのが先ほどから思っていました。

**渡邊：**そうか。あまりそういうことを意識したことはないんですね。

**フロア I：**できるだけ、診断というものに社会的な価値基準を含めないという流れがずっとあったので。

**渡邊：**DSMからの流れというのはそういう意味だ。

**フロア I：**そうですね。

**渡邊：**小塩先生たちのダーク・トライアドとかはどのような。あれは悪いパーソナリティなの？

**小塩：**あれは、人に迷惑をかける可能性のあるパーソナリティ群ですよな。僕はもともと自己愛を研究していたので、自己愛の研究ももともと病理からきていますし、人に対して、社会的にはあまりよくないようなものですが、研究を始めた頃はアメリカでは臨床ではないパーソナリティのところでもナルシズムの研究が尺度もできて、研究され始めていました。日本では臨床の本ばかりでした。そうした中で、そうではなくて普通の人の性格特性としての自己愛を扱うっていうのを説明するのは大変でした。

**渡邊：**もともと臨床的な、カウンセリングの対象というイメージ。

**小塩：**ナルシズムというと、やはりフロイト<sup>(8)</sup>からの歴史がありますので。どうしても精神病理としてのもので、一般的なパーソナリティとしては、特に当時私は青年期の発達のことから始めてやっていたので。いまだったら普通の人のパーソナリティ特性の1つとしてあって、社会的にはよくないけれども、よくないことがどうして残っているのか、という話になってきますよね。進化論的な話だと。当時はそういう枠組みがないので、発達的には、とかこういうふうに変化していくんです、というところに乗っけて学位論文を書いたんですが。15年前なので、いまとはまた枠組みが違うかなと。

**渡邊：**24年前に日本性格心理学会を作ったときに、日本にはパーソナリティ・プロパーがないから作ろうと言って作ったわけですよ。いまやあるわけですよ、日本には。

**小塩：**(若い方は) そうなっているみたいですよ。

**渡邊：**フロアのみなさん方はまさにそうなんだ。日本パーソナリティ心理学会のジャーナルにみなさん書いてくれて。最近はパーソナリティ分野は、『パーソナリティ研究』が一番審査が厳しくなっています。本当にありがたいことです。そういう意味では、パーソ

ナリティ心理学会は、パーソナリティの分野がプロパーとして日本でできていくのと一緒に育ってきたようなところがあるのかな。

**小塩：**そう思いますよ。私は日本パーソナリティ心理学会に最初からは参加していませんが、海外で読んだ論文は臨床でもないパーソナリティの雑誌に載っているわけです。日本でどこかという、日本パーソナリティ心理学会にしかなくて。他の学会に行っても、日本発達心理学会<sup>9)</sup>でもないし、病理や臨床でもないしということになると、日本パーソナリティ心理学会が一番フィットするということがありました。そうこうしていると、世代だと思いますが、海外の論文で読んだり勉強したりしたものにフィットする学会があるということが、こうした若い世代を生み出してきたのではないかなと思います。

**渡邊：**学会を作ってよかったですね、詫摩先生。

**詫摩：**そうですね。

## 文献・注

- (1) 丹野義彦 (1954- )。臨床心理学者。東京大学教授。共編著に『講座臨床心理学 3 異常心理学 I』『講座臨床心理学 4 異常心理学 I』など。
- (2) 菅原ますみ (1958- )。発達心理学者。お茶の水女子大学教授。
- (3) 北村俊則。精神医学者。北村メンタルヘルス研究所所長。
- (4) 島悟 (1951-2009)。精神科医。元京都文教大学教授。
- (5) 越智浩二郎。臨床心理学者。前京都文教大学教授。
- (6) ISSID (International Society for the Study of Individual Differences) のウェブサイト  
<http://www.issid.org.com/>
- (7) デ・ヤング (Colin G. DeYoung)。パーソナリティ心理学者。ミネソタ大学教授。
- (8) フロイト (S. Freud : 1856-1939) : 精神分析学者、精神科医。精神分析の創始者。
- (9) 日本発達心理学会のウェブサイト  
<http://www.jsdp.jp/>

## 著者

**渡邊 芳之** (わたなべ・よしゆき) :

帯広畜産大学人間科学研究部門教授。

主要著作・論文に、『性格とはなんだったのか——心理学と日常概念』(新

曜社, 2010年), 『心理学方法論』(朝

倉書店, 2007年, 編著), 『心理学・入門——心理学はこんなに面白い』(有斐閣, 2011年, 共著) など。web サイト

(<http://www.obihiro.ac.jp/~psychology/staff.html>), twitter: @

ynabe39。



**小塩 真司** (おしお・あつし) : 早稲

田大学文学学術院教授。主要著作・論

文に、『Progress & Application パー

ソナリティ心理学』(サイエンス社,

2014年), 『性格を科学する心理学の

はなし——血液型性格判断に別れを告げよう』(新曜社,

2011年), 『はじめて学ぶパーソナリティ心理学——個性

をめぐる冒険』(ミネルヴァ書房, 2010年) など。web サ

イト (<http://www.f.waseda.jp/oshio.at/>), twitter: @oshio\_at。



**北村 英哉** (きたむら・ひでや) : 関

西大学社会学部教授。主要著作・論

文に、『進化と感情から解き明かす社

会心理学』(有斐閣, 共著, 2012年),

『認知と感情——理性の復権を求め

て』(ナカニシヤ出版, 2003年), 『なぜ心理学をするのか

——心理学への案内』(北大路書房, 2006年) など。web

サイト (<http://members3.jcom.home.ne.jp/hideya.kitamura/>),

twitter: @pentax。



**詫摩 武俊** (たくな・たけとし)。東京都立大学名誉教授,

東京国際大学名誉教授。日本性格心理学会(現, 日本パー

ソナリティ心理学会) 初代理事長。

\* サイナビ! (URL 参照) に掲載された記事をもとに作成しています。

<http://chitosepress.com/category/psychology-navigation/>

\* 記載された内容の著作権等の知的財産権は、著者または著者に権利を許諾した者に帰属します。

\* 購入者・利用者は印刷・配布して使用することができます。

\* CC BY-ND ライセンスによって許諾されています。ライセンスの内容を知りたい方は <https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

